

## 愛知県三河地方の田楽・田遊びに関する食

—モチの分類を中心にして—

中野典子・馬場景子

Food concerning with Dengaku (田楽) and Ta-asobi (田遊び) ritual in Mikawa area,  
Aichi prefecture—On Classifying Mochi—

Noriko NAKANO and Keiko BABA

### はじめに

「食文化」への関心が近年益々高まりをみせている。この契機は1960年以降の経済高度成長により日本人の食嗜好が変化し、日本の伝統的な食文化が失われ、あるいは変容していったことにある。このような事態を踏まえ、農政審議会は1980年に日本型食文化の見直しを行った。1980年以降、食文化に関しての研究が盛んになり、歴史学、考古学、家政学、民俗学、社会学、人類学、食物学などの広範な分野で食研究に関する学際的な著書、論文が多く著されるようになった。日本の食文化の形成と発展がどのようになされたかの一端を、本稿では民俗学的視野から田楽・田遊びを、食文化からはモチを材料として捉え、両者の関係を考察していく。

愛知県は民俗行事が多く現存している県であり、特に三河地方は民俗行事の宝庫として知られる地域である。現存する民俗行事のなかでも田楽・田遊びという民俗行事は、他の県に比べて集中している。田楽とは中世より田植えの時に笛鼓を鳴らして踊り、跳ね、おかしなしぐさをすることによって農民の労をねぎらう芸能であった。また一方の田遊びとは一年間の耕作過程を模擬的に行う宗教行事である。このように発生の違いは見られるが、田楽・田遊びは稲作という共通項により有機的にむすびつき、現在の田楽・田遊びという民俗行事となっていった。田楽の中に田遊びの要素が見られ、田遊びの中にも田楽の要素が取り込まれている<sup>1)</sup>。また田楽・田遊びとは、その名称が示すように五穀豊饒を祈願する正月の予祝儀礼でもある。実施時期に関しては田作りの鋤入が正月に行われていたことと関係があると考えられる<sup>2)</sup>。

さらに愛知県は食文化の観点から、東日本と西日本の分岐となる地域でもある。田楽・田遊びに関係するこの地域特有の食が多くあるが、特にモチは行事のなかで大きな役割を果たしているといえる。正月、節供、など祝の場には欠くことができない食品である。モチは豊作のシンボルという意味を内包し、さらにモチ自体の色が白く、色のイメージが日本人にとっては清浄であり、モチが搗きたてでは目的に合わせ形をつくりやすいという利点と、さらに栄養的には消化しやす食品であることでハレの行事の際に多用されるに至っ

たのだと考えられる。

## I 愛知県内の田楽・田遊びの分布

愛知県下で、新春行事として田楽・田遊びがはる絶例も含め25箇所である。(分布図)



愛知県内田楽・田遊び分布図

分布の特徴として以下の項目をあげることができる。

1. 三河山間部に集中している
2. 東海道に沿って点在している
3. 愛知県の中心部に行事が存在していない

本論のテーマである三河地方のは次の12箇所では田楽・田遊びが行われている。

- (1) 愛知県北設楽郡設楽町黒倉
- (2) 愛知県北設楽郡設楽町田峰
- (3) 愛知県北設楽郡東栄町西蘭目<sup>3)</sup>
- (4) 愛知県南設楽郡鳳来寺町寺町七郷一色<sup>4)</sup>
- (5) 愛知県南設楽郡鳳来寺町門谷
- (6) 愛知県宝飯郡一宮町一宮
- (7) 愛知県宝飯郡小坂井町小坂井
- (8) 愛知県豊川市財賀町
- (9) 愛知県岡崎市舞木町宮下
- (10) 愛知県岡崎市滝町
- (11) 愛知県西尾市熱池神田
- (12) 愛知県豊橋市老津町

## II 調査地での田楽・田遊びの行事とモチとの関係

この章では調査地の行事次第とモチが果たす役割を中心に報告する。

### (1) 愛知県北設楽郡設楽町黒倉（黒倉田楽）

黒倉田楽は愛知県北設楽郡設楽町黒倉の黒倉神社脇の観音堂で旧暦の正月8日に行われていた。現在は2月第3日曜日に行われている。この行事を行う者は宮人（ミョウド）と呼ばれていて、鍵取を中心とした世襲性で行事を行っている。行事次第は次の通りである。

御神楽→万歳楽→ろん舞→順の舞→巫女舞→役所年礼→干支くり→種あて→肥草取り→代馬→種蒔→水口取り→鳥追い→札配苗見→田植雇人→田打→苗取り→田植→惣田楽

モチに関係する演目は「役所年礼」で、約120cmの棒の先に直径30cmの鏡餅2個を挟み、担いだ者が登場する。「代馬」では直径50cmの丸餅の中心に棒を刺し、代馬のしぐさをする。

### (2) 愛知県北設楽郡設楽町田峰（田峰田楽）

この行事は田峰観音の堂内で行われている。かつては旧暦正月17日から19日に行われた行事であったが、現在では2月11日に行われている。この行事は田楽案によって世襲性で行われている。田峰田楽は、昼田楽・夜田楽・朝田楽の3部で構成されている。モチと関連がある夜田楽は田遊びが主体となって次の順に演じられる。

扇の舞→万歳楽→仏の舞→日選び→堰さらい→種選び→雇人→田打ち→代ならし→芽づら取り→大足→初蒔き→おしづめよなぞう→鳥追い→芝刈り（やまほめ）→代掻き→大足→雇人（早乙女）→田植え

「日選び」「堰さらい」「種選び」「雇人」の演目では鳥追い役と羽織役が作った約1mのほどの檜の割り木の先に直径20cmの丸餅を挟んで作った鍬を肩に担ぐ。「日選び」では鳥追と羽織が餅で作った鍬を担ぎ、四方拝を行い、唱えごとをする。「堰さらい」では餅付きの鍬を立て、鍬を使う所作をする。「種選び」「雇人」では「堰さらい」と異なるのは唱えごとのみで、鍬を使う所作は同じである。「田打ち」では、太鼓の上に菰をしき、飯櫃の蓋を乗せて、鳥追と羽織は餅付きの鍬で蓋を押さえ、他の役はシキミの枝で蓋をたたく。「代掻き」では檜の串に刺した長さ約10cmのべらべら餅数枚を心取り役、鼻取り役、駒役が持ち代掻の所作をする。べらべら餅は行事終了後、見物人が奪いあい、持ち帰って家人や牛に食べさせ、その年の健康を祈願したとの言い伝えがある。「田植え」では、鳥追と羽織が「田打ち」と同様の所作を行うが、この演目には魔払い、子守、汁持ち、飯持ちの各役が顔に約20cmの化粧餅で粉つけて登場する。

田峰田楽では、行事準備のため柵宜、羽織、鳥追い、笛吹き各役は7日間、他の役は3日間の水垢離を行う。食事に関しても行事前日の10日、当日の11日には決まり事がある。10日の昼食と11日の吸い物の中には餅が一切れ入れられる。

### (3) 愛知県宝飯郡一宮町一宮（田遊び祭）

田遊び祭は1月3日砥鹿神社で行われる。田遊びが行われる場所は拜殿正面であり、そこは神田と称され櫛が一面にしかれる。行事は次の次第である。

田打行事→苗代行事→種蒔行事→鳥追行事→田植行事→稲刈行事→束かぞえ行事→稲むら行事

砥鹿神社の田遊び祭で使われるモチは神田の前中央の三方に載せられた飾りの重餅のみである。三方の脇には実物の稲に鎌が数本刺してあることが特徴である。



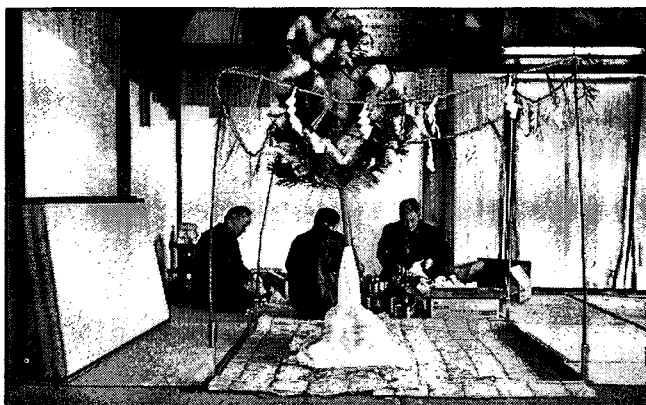
砥鹿神社田遊び祭の三宝の重餅

#### (4) 愛知県宝飯郡小坂井町小坂井（御田祭）

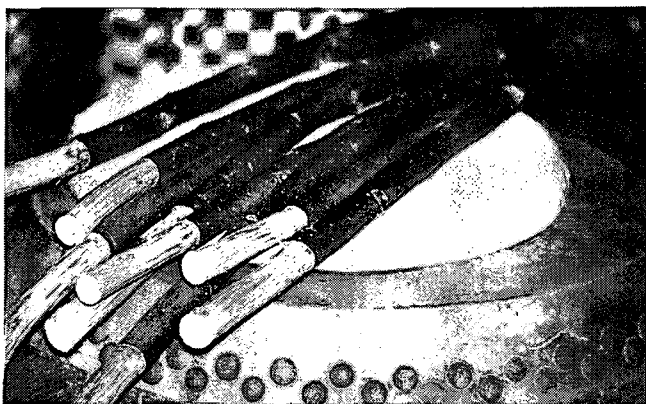
旧暦正月7日の夕方6時より菟足神社で行われる。拝殿には蓬来飾が備えられる。中心には根付きの三階松が置かれ、根もとには小判餅（牛の舌餅）が松の根を隠す程度敷かれてある。小判餅のサイズは長さ約30cm、幅10cmほどの薄い長円形である。枚数は36枚とも48枚とも言われているが、調査時（1997）には餅の数は約80枚であった。餅の数の増加原因は行事終了時に見物人に餅が切り分けられ配布されることにも関係しているようである。行事の演目は次の通りである。

田打→初まき→苗代の鳥追い→苗代の草取り→馬の代掻き→代ならし→苗打ち  
→昼間持ち→田草取り→稲の鳥追い→稲刈→稲の数→稲ぶら

演目は「田打」の時に田餅（田地餅）が、太鼓の上に置かれる。約50cmの円形で幅は5cm程度であり、実際は糯米ではなく板に白紙を貼った物である。鋤を模した1m程度の柳の木で田餅を作男が打つ。見物をしている子供たちは、隙をねらって田餅を奪い境内を駆けまわる。その都度作男は田餅を子供から取り返し、演目を続ける。各演目ごとに田餅を奪い、取り戻す光景が繰り返される。この子供たちはスズメといわれ、田餅を奪うことができた子供は将来、田地を持つことができるという言い伝えがある。「馬の代掻き」では馬の轡を模した餅が使用される。形は直径約15cm、幅5cmの丸餅2個の中央に穴が空けてあり、穴に柳の木を通す。3人の作男がこの轡を持ち、太鼓の回りを跳ねながら回る。「昼間持ち」では孕み女役が直径10cmの丸餅を作男に渡す。「稲刈」では、「昼間持ち」と同型の餅が砥石と称されて作男に渡される。「稲ぶら」では、作男の一人が太鼓にうつぶせになり、背中に鏡餅をのせ、伸び上がる。行事終了時には一枚の小判餅3つに切り分けられ、菓子とともに見物人に配られる。かつては餅投げが行われていたが、衛生上の都合でとりやめられた。



菟足神社御田祭の蓬来飾



菟足神社御田祭の田地餅



菟足神社御田祭の嚮餅

(5) 愛知県豊川市財賀町（お田植祭）

お田植祭は財賀寺の観音堂で、正月3日に行われる。かつては正月5日の行事であった。財賀寺のお田植祭は1904年から1918年中断されていた。行事を奉仕する人は11名で役人（やくうど）と呼ばれ、世襲性で白井、山口、細井、岩瀬の各家の男性のみが行事を伝えている。養子や入夫はその代に限り役人になることはできない。しかし役人の家から分家した人や、養子にいった人は役人になることができるという決まりがある。お田植祭に関しての史料としては、元禄9年（1696）の「田楽案文」がある。行事の演目の構成は次の通りである。

田打→苗代かき→種蒔き→水口祭→鳥追→植代かき→田植→牛放し→昼飯持ち

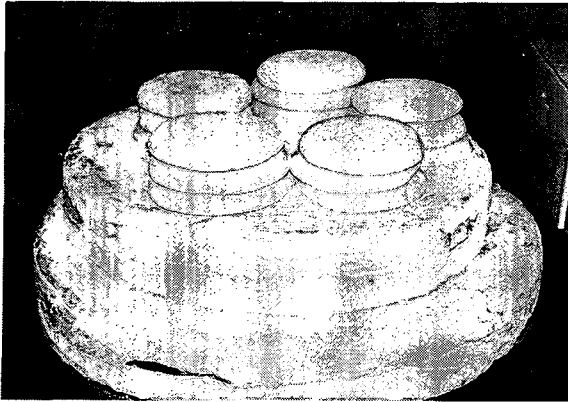
「植代かき」では奉行役が笠餅を担ぎ、白扇をあおぎながら、太鼓を廻る。笠餅は直径約50cmで、中央に穴があけられ、約90cmの檜の棒が通されている。「牛放し」でも奉行役が「植代かき」と同様のしぐさをする。この行事で使われたモチは集落の人に分配される。これを食べると夏病みしないとの言い伝えがある。



財賀寺お田植祭の笠餅

(6) 愛知県岡崎市舞木町宮下（御田植神事／デンデンガッサリ）

御田植神事は正月3日、山中八幡宮で行われる。別名をデンデンガッサリとも言う。この名称は、行事のなかで歌われるデンデンガッサリヤ、ハッチキヒライテガッサリヤに由来していると言われている。行事は前歌、後歌、せりふ、所作に分かれている。前歌の中には稲の品種、粳まき、苗取、草取、稲刈、田植女、化粧を内容とする歌詞が盛り込まれている。後歌では伊勢踊りが歌われる。行事のほとんどが歌で占められているので、実際に所作が行われ、モチが使用される演目は「稲刈」の時に円形の餅を5ないしは6個、役の人数分だけ作られた円形の餅を鎌に見立てる。中央に置かれた太鼓の周りを囲んだ役が、歌詞に合わせて何度もモチを振りおろす。1個の餅には3合も糯米が使われている。行事の最後に藁を牛の角に見立て、頭に巻いた役が四つんばいになり、その上に一俵どりの同型の重ねの飾り餅が乗せられる。牛役が倒れ込むと、見物人たちは、丈夫な牛でも倒れるほどの豊作だといって喜ぶ。この重ね餅は行事の終了と同時に見物人に配布される。



山中八幡宮の重ね餅と鎌餅



### III 田楽・田遊びのモチの分類

田楽・田遊びのモチは次の3つに分類することが可能であった。

飾るモチ

配布されるモチ

道具として使用されるモチ

各項目は必ずしも単独で行われるのではなく、組合わされて行われている場合がある。可能な組合せは次のようになる。

飾るモチ

飾る

飾る→道具→配布

飾る→道具

飾る→配布

配布されるモチ

配布

配布→飾る

配布→道具→飾る

道具として使用されるモチ

道具

道具→配布

道具→配布→飾る

砥鹿神社の餅

山中八幡宮の重ね餅

×

菟足神社の小判餅

× (静岡県藤森の牛の舌餅)

×

×

財賀寺の笠餅, 黒倉神社の丸餅,  
田峯観音の鍬餅・べらべら餅・  
化粧餅, 菟足神社の砥石餅・弁当,  
田地餅, 轡餅, 山中八幡宮の鎌餅

×

×

飾るモチはほとんどの調査地でみられた。しかし飾るだけが目的になっているのは砥鹿神社の三宝の餅だけであった。山中八幡宮の重ね餅のように飾られ、道具として使用され、さらには配布されるというようにモチが3つの項目を果たしている例がみられた。飾り、道具として使用するは例はなかった。飾り、配布するは菟足神社の小判餅の例である。また田楽・田遊びの飾りモチは大きさや形が様々である。

田楽・田遊びのモチはすべて行事が終了すると切り分けられ集落内の各家に配られているが、ここでいう配布されるモチとは、行事内で見物人に配布されることを意味する。すなわち行事の一部としての配布のことである。配布されるだけのモチは三河地方の調査地では見られなかったが、静岡県大井川町藤守の田遊びでは、奉納のお礼として見物人に箱入りの牛の舌餅を2枚渡している。藤守では数千枚の牛の舌餅を配布用に作っている。菟足神社では小判餅の数は以前は36枚あるいは48枚であったが、現在では80枚と数が増えていることからわかるようにできるだけ多くの見物人への配布が考慮されていると思われる。これに反してモチを奪いあうモチ投げも田楽・田遊び行事には見られる。前記の大井川町の藤守や田峯では行事の演目の中でモチが投げられる。その時のモチは牛の舌餅、べらべら餅である。このように配布とモチ投げが両方並行して行われる例もある。菟足神社でもかつてはモチ投げが行われていた。

道具として使用されるモチは田楽・田遊びでの特徴である。他の民俗行事では餅を道具として使用する例は見られない。田楽・田遊びではモチを鍬、鎌、轡などに見立てる例が見られるが、これはモチを粗末に扱っているのではなく、むしろ豊饒のシンボルとして、あるいは福をもたらすシンボルを農具に仕立てていると考えることができる。

#### IV まとめ

以上のように田楽・田遊びという民俗行事とモチとは密接に結び付いている。三河地方のほとんどの田楽・田遊び行事で、モチは単に飾られるという範囲を越して、モチ自体が主要な役割を演じていることが明らかになった。本稿では食品を通して民俗行事を考察する可能性を示唆した。新春の予祝儀礼である田楽・田遊びが歯固餅あるいは鏡餅に起因する正月のモチと結び付いたと仮定することができる。道具としてのモチ使用には田作りの鍬入が正月に行われたことも関連を考慮しなければならない。しかし田楽・田遊びとモチの関係は、単に2つの要素が重なりあっているのではなく、田楽と田遊びの関係、田遊びと鍬入れとの関係、農具と年中行事との関係、モチと田楽・田遊びの関係、正月とモチの関係などが3次元的にかつ複雑に結び付き成立していると考えている。本論では愛知県三河地方での調査から田楽・田遊び行事とモチの関係を論じたが、以上の複数の関連事項を明らかにし、隣接する県の調査を行うことで、田楽・田遊び行事とモチとの更なる関係を理解することが可能であると考えている。

本論文の概要は、日本家政学会第49回大会で発表した。



## 愛知県三河地方の田楽・田遊びに関する食

- 註1 五来重, 桜井徳太郎, 大島建彦, 宮田登編『講座 日本の民俗宗教6』, 弘文堂, 1979
- 2 田遊びと田作りの鍬入れとの関係は多くの研究者が示唆している。特に新井恒易, 『農と田遊びの研究』, 明治書院(1981)はその根拠に詳しい。
- 3 愛知県北設楽郡東栄町西蘭目の田楽ではモチがまったく使用されていない。行事に次第は田楽・田遊びというより花祭りの要素がかなり強い。北設楽郡の田楽はここ以外でも花祭りの影響が大きい。また北設楽郡では田楽・田遊びの廃絶例が多い。詳細は今後の調査で明らかにする必要があると考えているが, 花祭りのような規模の大きい祭りが田楽・田遊びのような地味な祭りを吸収していった可能性があると考えている。ただ田楽次第の演目の中での木製の備中, 鍬, 鶴嘴鋸を持って舞う農具の舞は田楽の系統を引くと考えられる。食に関しては種籾が行事中に使用されることは今後の調査にとって重要であると考えている。
- 4 愛知県南設楽郡鳳来町七郷一色の黒沢の田楽は静岡県境で行われる行事である。この田楽の主催者である荻野仙七氏によると行事当日にはかつて市が立つ程, 近在からの見物人があふれていたとのことである。ここの行事に関しては静岡県の山間部の田楽・田遊び行事と同系統であるとされている。

### 参考資料

- 1) 新井恒易: 『農と田遊びの研究』, 明治書院, 1981
- 2) 早川孝太郎: 『花祭り』国書刊行会, 1988
- 3) 本田安次: 『日本の伝統芸能』錦生社, 1994
- 4) 新城南北設楽広域市町村圏協議会編: 『奥三河歳事記』新葉社, 1995
- 5) 大東町教育委員会編: 『鍬が語る大東町』, 1995
- 6) 田峯家庭教育推進委員会, 田峯小学校父母教師会編: 『だみねのまつり田楽と地狂言』, 1991
- 7) 小坂井町教育委員会編: 菟足神社の御田祭, 1965

### 謝 辞

本研究を行うにあたり, 日本食生活文化財団の助成を戴きました。ここに深く感謝いたします。